

おつかれさま

新しく教職員になった

みなさんへ

新しく教職員になられたみなさんおつかれさま。

一学期はいかがでしたか。

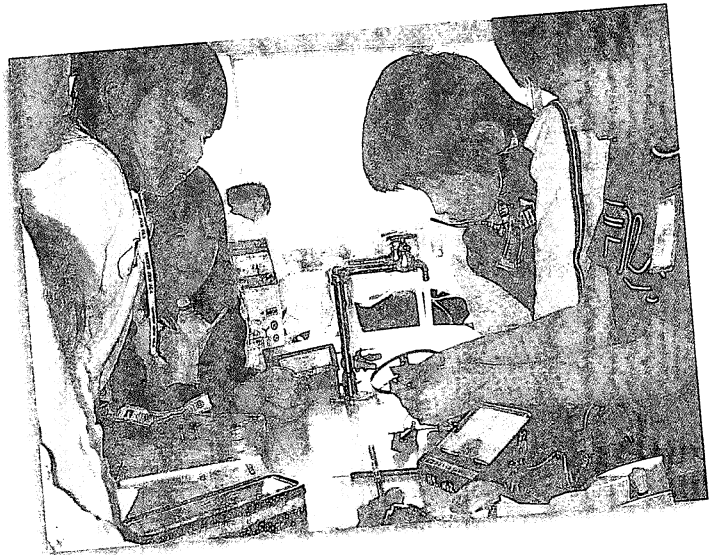
思いえがいていた学校とは違う現実や多忙な日々に不安と緊張の連続ではなかったでしょうか。

それでも、子どもたちの笑顔や職場の仲間の励ましや心くばりに元気をもらった日もあったでしょう。

まずは、ゆつくりと心と身体を休ませて下さい。

そして、この特集をお読み下さい。

「学ぶこと」「自分の中の木」など、いろんな方からのメッセージが2学期からの元気と希望を育んでくれることと思います。



教師になったみなさんへ

ふじみ野市立東台小学校 篠田 友子

私が教師になった頃は、土曜日も半日授業がありました。土曜日の午後は、一週間の貯まった仕事をする日にしていました。週に6日出勤していたのですが、今より余裕があったように感じます。今は、週5日にたっぷり仕事が詰め込まれ、夜遅くまで学校に残り仕事をしていたり、休日である土日に仕事に來ていたりしています。常にかに追われるように仕事をしています。教職員の負担はもう限界にきているのではないのでしょうか。

自分のスタイルをさがそう

私は、結婚・出産を経験し、仕事に対する自分の意識が変わってきました。自分の都合だけでは仕事ができなくなったのです。なぜか、学期末など子どもは熱を出します。予測しない年休を取ることになるわけで、授業もいつも早め早めに予定の箇所を終わらせるようになってき

ました。時間のない中で、いかにして教材準備の時間を減らし、子どもに分かる授業を展開するか悩んできました。そして、同じ学年の先生と、共同で取り組みことにしました。学年会でしっかり打ち合わせをして、教科で分担して教材を作ったり、時には、教科で授業を交換したりしてきました。小学校の教員といっても指導するうえで得意不得意な教科も当然あります。教材準備の負担が減り、気が楽になったことを思い出します。組んでいるメンバーや学年にもよるので、話しながら自分に合ったやり方を探していくとよいと思います。年令は違っても仲間としてお互いに助け合っていかなないと、今の学校では勤まらないと感じています。

のんきに根気よく元気で

私は、今、発達障がいを持つ子どもたち

ちと日々学習しています。教師がこうしたいと思っても、なかなか思うようにことが運ばないのが、この子どもたちの教育です。子どもたちの様子を良く見て、その子の目線に立って何をしたらよいのか考えていかないと難しいです。教師の威厳やプライドだとか、数値的にできた・できないを判断することは、何の意味も持たなくなります。ニーズに応じた教育とは、謙虚に子どもたちから教えてもらうものだと思います。肩の力を抜いて、子どもたちのニーズに耳と目と心を傾けて、学びにくさや生きにくさを感じている子どもたちを支えていきたいと思っています。みなさんにも、そんな先生になって欲しいと思います。

しかし、教師も所詮は一人の人間。失敗もすれば、批判をされることだってあります。そんな時は一緒に話を聞いてくれる仲間をたくさん持っている、明日への元気が出てくるでしょう。先輩の実践を聞き学ぶこともいいかもしれません。組合はそんな場でもあります。自分の個性を輝かせて、魅力ある子どもたちを育てていきたいですね。

「教師」という仕事を通して

鳩山町立鳩山中学校 沖田 晴美

教師を志したわけ

私の夢はプロ野球の選手でした。しかし、はかなくも夢破れたとき、何が自分のできるだろうと悩み、もがき、苦しんだ末決意したのが「教師」でした。その最大の理由は、恩師といえる先生が身近に存在としていたことがあげられます。その恩師は、私の人生に随所で指針を与えてくださいました。また、教師という職業の素晴らしさを間近で教えてくださいました。そして、多くの子どもたちが慕い、尊敬する存在でした。自分も教師となって、ただ知識を蓄えた頭でつかちの人間ではなく、みんなの幸せを考えられる心の温かい人間を、一人でも多く育てたいと考えました。

全生研との出会い

大学生の時、よく立ち寄った本屋で何気なく手にした教育実践本が、全生研（全国生活指導研究協議会）の書物でした。そこに描かれているダイナミックな実践

に触れ、衝撃を受けたことを今でも覚えています。そこに描かれているのは、子どもが主役の生き生きとした姿でした。生徒が主人公の学校がありました。これこそ自分が求めている学校だと思いました。

民主教育と組合

私は、今年で教職二十九年目を迎えました。新任のころには想像できない経験年数になりました。組合に加入したのは二年目からです。加入の理由の第一は、組合の先生が社会の事に詳しくあったからです。私は中学の社会科の教師ですが、その方たちより恥ずかしいほど社会の事がわかっていませんでした。理科の教師や国語の教師の方がよほど知っていました。これでは私の面目は丸潰れです。しかしそれもそのはずで、なぜなら、彼らは生きた社会を学んでいたからです。第二の理由は、彼らは偉ぶるところが無かったからです。決して高圧的でなく、未熟な人間の私を温かく受け入れ、同等

に接してくれました。その人間愛に強く惹かれたからです。

そして第三の理由は、組合の先輩は主体的に研修をしていたからです。研修という堅苦しさを感じますが、サークルで互いに学び合う学習でした。時には宿泊しながら学ぶこともありました。教師には研修権が認められています。これは自主的研修を確保することが趣旨（教特法第二一条）です。まさに組合の先輩の学習方法は、この精神に則っていると思いました。

歴史が証明しているから

私が中学の社会科教師だからと言うわけではありませんが、組合の重要性は歴史が証明していると思います。人類の歩みの中で誕生した民衆の宝物だと思っています。この宝物を易々と手放す気持ちはなれません。勿論これに代わるものがあるならば固執するものではありません。しかし、今はまだ見当たりません。教育が権力者の道具にされてはいけません。しかし、何もしなかったら渡ってしまうでしょう。そうならないためにも組合は必要な存在だと思っています。戦争による大きな代償と引き換えに手に入れたこの宝物を守り続けることが、教師の役割だと思っています。

「学ぶこと」を伝える

県立伊奈学園総合高等学校 伊藤 稔

春から教壇に立たれている皆さん、もう教師という仕事に慣れましたか。

初めて教壇にたつてから、私はすでに30年以上が経過していますが、未だに自分が黒板を背にしていることに不思議な感覚を覚えることがあります。私はこちら側に立っていてほんとうにいいのだろうか。

子どもたちの注目のなか、私は自信ありげに授業をしています。しかし、授業が終わった後、私は未だに教師としては未熟で不十分なのだと思います。経験が積み重なるともなくなるとも思っていました。最近では、むしろこの自分の未熟さ、不十分さの自覚のなかにこそ教師という仕事の本質があるのではないかと思っています。学校はたくさんさんの知識を子どもたちに

伝える場でもあります。空っぽのビンに液体を注ぎこむようなイメージです。しかし、これとはあきらかに違ったやり方でしか伝えられないものがあるのではないかと。たとえば「学ぶこと」はそのひとつであり、そして、この「学ぶこと」の伝達にこそ、「学ぶこと」の本質があるのではと思うのです。

では、「学ぶこと」はどうやって伝えられるのでしょうか。

学ぶとは「まねぶ」という言葉が語源です。「まねぶ」とは「真似ぶ」と書いて、「真似をする」という意味です。すなわち「学ぶこと」の本来の意味は「真似ること」であるということになります。学びとは、本来的には、知識を注入されることではなく、他者の真似をすることであるらしい。とすれば、「学ぶこと」が成立するには、真似をするモデルがそこ

に存在し、それを真似ることができなければならぬということになります。

教師が、自らの未熟さ、不十分さ、自分には「学ぶこと」がたくさんあるということに対する真摯な自覚をもち、「学ぶこと」に対して開かれている。そして「学ぶこと」が楽しく仕方がないというその時、子どもたちはそれを真似るので、「学ぶこと」が伝わるといえる。こういうことではないかと思えます。

皆さんの周りにも「学ぶこと」が楽しくて仕方がない教師がたくさんいると思います。皆さんがその同僚を「真似ること」、そしてまた、その皆さんを子どもたちが「真似ること」、こうした「学ぶこと」の連なりによって学校は学びの場となっていくます。

皆さんには、自分の未熟さと不十分さを大切にして欲しいし、そして「学ぶこと」に対して真摯であって欲しいと願っています。

一人で悩まないで

県立特別支援学校塙保己一学園(県立盲学校) 寺田 健太郎

毎年、教員採用試験の出願前になると、何人かに声をかけられ、志望動機を見ることがあります。当たり前ですが、教員を志望する動機は十人十色で、普段一緒に働いている臨時的任用の人たちが、どのような思いで普段の教育活動に邁進しているのか、実に興味深いものです。教員採用試験を突破し、新たな気持ちで4月からそれぞれの職場で働いていらっしゃる新任の皆さん方は、どのような志望動機で教員という仕事を指されたのでしょうか。

志望動機を見ていて、それぞれの考える「子ども観」の違いなどがよく見えてきます。世の中には、①「子どもは有能な存在である」、②「子どもたちは未熟な存在である」という二つの異なる「子ども観」があると思うのですが、前者だと「だからこそ、子どもの言葉に真剣に

耳を傾け、子どもの考え・理論・夢を尊重するような実践が必要である」という教育観、後者だと「だからこそ教え込まなければならぬ」という教育観になるのではないかと思います。残念ながら今の日本の教育は後者の傾向が強いような気がしますが、私は前者の立場で、「その子その子がその気になって、自分の持ち味をつくりだし、その持ち味をもって社会に参加していく能力を獲得することを、助け、励ますこと」という太田堯先生の言葉を胸に子どもたちに向かい合っていることを常々伝えていきます。

こういうことがしたい、自分はこういう教員になりたいなど希望を胸に新しい職場に着任したはずですが、今の学校現場は本当に多忙で、授業のことや児童生徒のこと、部活のことなど様々なことに「もっとこうしたいのに」とか「こんな

はずでは」とか「なんだかうまくいかないなあ」など悩んでいる人もきっと多いはずです。そんな時、一人で悩まずに、その悩みを共有してもらっていますか。私は何かあるとすぐ先輩や同僚を捕まえて話を聞いてもらいアドバイスをもらい、これまで育ててきてもらいました。「今、立て込んでるから後で」と言われたことはありますが、「一緒に子どもの話をしたくない」などと言われたことはなく、きつと教員はみんな子どものことや授業のことを話したいのだと思っています。

職場だけでなく、組合主催の学習会や先輩方に紹介してもらった民間教育団体などの学びの場も自分が子どもたちと向き合っていく上でとても役立っています。教員は児童生徒の為に学んでなんぼ、共に語り合い学び合える人間関係・職場をつくり、日々の実践に取り組んでいきましょう。

自分の中の木

飯能市立西川小学校養護教諭 寺西 正子

健康診断や事後措置を行いながら宿泊を伴う行事への参加や学校保健委員会の企画・運営など、めまぐるしい毎日を過ごされていることでしょうか。私も経験を重ねていますが、毎年この時期は忙しさに追われます。

初任の皆さんは、夢を実現させ養護教諭として現場にたつた今、どんな思いを抱いているのでしょうか？

記憶を辿り私の初任の頃を思い返してみます。児童数1400名の大規模校に着任し、当時はまだ複数配置ではなかったため一人で悪戦苦闘の毎日でした。ひとと教室分の広さのある保健室も休み時間は来室者で大賑わい。授業中も来室者は絶えません。健康診断も3日かけておこなう検診もあり、校医さんとの連絡調整は気がぬけません。検診後の事後措置も、お知らせの用紙をいったい何百枚書いたことでしょうか。けが人も多く病院への引

率も頻繁でした。

今、思えば初任から5年くらいの間何をしていたのかほとんど記憶にありません。その日一日を過ごすことで精一杯でした。その頃「早く年をとりたい」と思っていたことだけは記憶に残っています。行事ひとつ行うにしても、全校の児童を動かし先生方をお願いすることも多く、経験が浅い故にうまく伝えられず悔しい思いや苦い経験もありました。学校に一人の専門職なのですが、組織を動かす事は簡単な事ではありません。

行き詰まった私に、一人で抱えなくてもいいということに気づかせてくれたのは職場の先生方であり、養護教諭の仲間でした。専門職である自分がやらなくてはいけなかったこと、まずはまわりの職員とのコミュニケーションを図ること、その人間関係が仕事に反映していくことを実感しました。まわりの職

員の協力が得られるようになり、初めて自分が考えている保健室が展開できるのです。たぶんそんな人間関係を築くまでに5年を要したのでしょうか。

子ども、保護者、教師がそれぞれの思いを伝えあえる人間関係が養護教諭の財産だと実感しています。

草原に一本の若木が立っています。まわりの期待もあり一生懸命枝葉を茂らそうとします。でもまだ根の張りが弱く、強い風や雨に打たれると傾いてしまします。まわりに木々が植えられました。若木は、まわりの木々が風を和らげ雨をしのいでくれることで、ゆつくりとしっかりと根を張ることができず。根と根は絡み枝葉も茂り支え合うことで、幹を太らせ枝葉を広げ立派な木となっていくます。

時として思いがけない強風や嵐に見舞われることがあるかもしれません。でも、自分を支えてくれる仲間がいれば、少しくらい強い嵐だって大丈夫です。私たちは養護教諭というラインでつながっています。決して一人ではありません。皆さんも、より多くの人とつながってください。そして、養護教諭になりたいと願った初心を忘れないでほしいと思います。

ALL FOR ONE & ONE FOR ALL

川口市立里小学校事務職員 鈴木博人

新採用の皆さんはやつと落ちついた頃でしょうか。4月から慌ただしい日々が続き、よくわからないまま時間だけが過ぎていった1学期だったと思います。やつと自分がやってきたことを振り返る余裕くらいは生まれてきたところでしょうか。もし間違っていたことがあったとしても今はまだ気にしないでください。間違ったと気づけたことが、むしろ良かったのです。

仕事で困った時、事務職員という仕事は職場内に助けを求めづらいたことが多々あると思います。1人職ゆえ、職場内では話づらいでしょう。そんな時、気軽に話せるように隣の学校や市内の事務職員、または同期の人とも「繋がり」を大切にしてください。もちろん職場の人たちとの関係も大切です。しかし、学校事務職員は「横の繋がり」が本当に必要だ

と感じます。これはきつと、私だけでなく多くの諸先輩方がおっしゃられることでしょう。

また、周りの仕事を知ること、自分にとってプラスになります。マイペースに仕事をするのもいいでしょう。しかし、他校や市外の仕事のやり方を知った上での「自分流」の仕事をするのと、初任の頃から自分のやり方しか知らない人のそれとでは、大きく違います。今はまだ若いうちなので気軽に教わるのが難しくはないでしょう。しかし、年数を重ねてから聞くことは勇気がいります。今のうちに色々な方から話を聞いたり、また相談をして、時に間違いを正してもらい、時に人のやり方を真似たりして、自分なりのスタイルを確立していただく



(本文とは関係ありません)

はじめまして

学校栄養職員 大場 恭子

はじめまして。

あたらしく学校栄養士の仲間になった
あなたを心から歓迎します。

栄養士の仕事にはもう慣れましたか？

毎日が忙しくて、覚えることもたくさんあつて、大変な仕事だと感じることもありますよね。

子どもや食と関われる仕事にやりがいを感じているでしょうか？

単独校に勤務することになった方は、忙しい学校のなかで、給食のことを相談できる先生はいますか？子どもたちはかわいいですか？

センターに勤務することになった方は、学校に子どもの顔を見に行く機会がありますか？

想像していた仕事とだいぶ違いましたか？

私は20年近く、給食センターでしか勤務

務めたことがないのです。

子どもたちに食べさせたいものと、現実の環境の中で提供できる給食との差をずっと感じてきました。

学校栄養士として働いて数ヶ月たつて、いろいろな疑問や課題を感じていることと思います。

私自身、もつといろいろ勉強していたらと思うことがたくさんあります。食教育はもちろん、放射能のことや、食物アレルギーの対応など、難しい課題です。

そんなとき、身近に相談できる栄養士や先生はいますか？職場以外にも相談できる人がいるというのも心強いものです。

私も迷うことだらけで、判断の基準をどこにもつていったらよいか、それを明らかにしたり、検証したりするとき信頼できる場所のひとつが組合かなと思って

います。

また、自分だけではどうすることもできない課題もたくさんあります。

直営、民間委託に関わらず、正規職員が減らされていること、施設設備の不十分さ、統一献立によつて、自分の学校にあわせた献立が出来ないなど、たくさん問題があります。

栄養士が一枚に一名いないこと、子ども数の減少により、少ない人数がさらに削られていることもあります。東京都では、栄養士も民間委託化されていて、他人ごとではないと感じています。

これでいいのか？と思う疑問や不安を仲間と話し合い、解決できる道を探ることが、自分自身にとつても、子どもにとつてもいいことかなと思います。

組合では、県内に限らず、お互いの実践を学んだり、栄養士だけでなく、教員と本音で話し合えたりでき、自分の力になつていと感じます。たまにやめたいといいながら、続けてこられたのは、仲間がいたからです。たくさん課題がありますが、それを一緒に話しましょう。

学校図書館で

授業に磨きを！

埼玉県立新座高校 宮崎健太郎

新任教諭の皆さん、お勤めの学校に図書館はありますか？ え、ない？

いや、そんなことはないはず。学校に図書館をおくことは「学校図書館法」で義務付けられているからです。県内の公立高校と盲学校には司書の資格を持つ私の仲間が、小中学校でも図書館担当教諭のほか、市町村によって自治体独自の雇用で司書職員や図書館整理員と呼ばれる方が図書館の整備にあたっています。

学校図書館は子どもたちに一番身近な図書館。「先生が紹介してくれた本、読みたい！」と思った高校生も、「道端で見つけた虫の名前が知りたい！」と思った小学生も、読みたい本を、また知りたいことのヒントをすぐ探せる場です。

司書は、資料の展示や図書館通信などを通して子どもの好奇心を引き出すように努めています。さらに、図書館の資料

や場そのものがコミュニケーションを取り持ち、彼らの人間関係を育むことも少なくありません。

先生方の授業づくりをお手伝いするのも、学校図書館の重要な役割です。

単元と関連する本を図書館で用意し、授業の導入やまとめで紹介する。これだけで子どもたちの関心はグッと広がります。司書はそのための資料を集めたり、授業の中で紹介するお手伝いができます。

さらに調べ学習は、聞くだけの授業よりも子どもたちに深い理解を得させられます。私の勤務校では調査をポスターにまとめて口頭で発表するポスターセッションの授業が効果をあげています。

子どもにとっても読書は重要です。さらに本を活用した授業を通して、子どもたちはネットの情報より体系的で視野の

広い、厚みのある情報の世界に誘われることができるでしょう。

授業へのお手伝いを通して、皆さんの授業を支え、子どもの好奇心を全開にするお手伝いできれば、こんなに幸せなことはありません。ぜひ、私たち司書にお気軽にご相談ください。



(本文とは関係ありません)

母親たちの悩みに寄り添って

保護者 関口 いづみ

親になって22年。育児を通して多くの経験と考える機会を得ることができたことを心から幸せだと感じています。

22年前、私は県立高校で生物を教えていました。当時、担任をしていた若い私にはひとりひとりの存在をどう受け止めていいのかゆつくり考える余裕などありませんでした。それでも、志を持って教師という仕事を選び、大好きな生物の世界を生徒たちに伝えることに喜びを覚え、何事にも一生懸命だったことを懐かしく思い出します。

さて、そんな私の大きな転機は、娘の誕生でした。当時、まだまだ保育園事情も今ほど整っておらず、産休に入った私を選んだ方法は、教師を辞めることでした。今でも後悔していませんが、志半ばで道をあきらめた自分の気持ちに向き合

うために始めたのが、幼少期の子どもたちを対象とした「環境NGOちびっこ探検隊」という活動でした。そこには、就学前から小学校低学年の小さな子どもたちが集まり、子育てや教育に強い関心と大きな不安を抱えた若い母親たちとの交流が始まりました。

思わず始めた活動の中で、母親たちの悩みに向き合い気づいたことは、教師たちや子どもたちはもちろん、母親たちも大きな評価の厳しさにさらされているということです。「評価」という現実には「自己責任」という恐怖が追い打ちをかけ、母親たちはますます不安を増大させています。社会全体に「寛容さ」が失われ、子ども将来はすべて母親自身の評価につながり、孤立せざるをえないのです。

「モンスターパーアレント」と言われる教師たちを脅かす母親たちを目の当たりにすることもあり、首をかしげたくなるような言動に、理解に苦しむこともあります。

しかし、母親たちが教師に向けて発する「声」は、「お願い、助けて。私の不安を受け止めて。」という叫びなのかとさえ思うのです。私の活動の中では、「不安な気持ちを声に出して。きっと楽になるから。」と声をかけ、少し先輩の母親たちが「大変だったね。でも大丈夫。うちもそんなことがあったから。」と返します。たったそれだけで、ホッとした表情に戻ります。自分の悩みに寄り添い共感してもらうことが、安心につながったのです。

22年前に生まれた娘も、この春教師になりました。元気な子どもたちの笑顔に励まされ、毎日の大量な仕事に愚痴をこぼしながらも、毎朝「行ってきます！」という声を残し出かけていきます。そのうしろ姿を目で追いながら「今日も子どもたちと楽しく過ごせますように。」と祈っています。

新採用者の声

子どもたちの笑顔を想像して

小学校教員

4月1日から新任教員として働き出し、毎日が目まぐるしく過ぎていきます。「学校の先生って、本当に大変」と思いながら日々職務にあたっています。1日の仕事内容は、主に「クラスの生活指導・教科指導」と「一職員としての仕事」があります。前者は、朝、子どもたちが教室に入るところから下校を見送るまで、ほぼ付きっきりで授業や、朝の会や帰りの会、給食・清掃指導等を行います。休み時間は宿題チェックや丸つけ、子どもと遊ぶ、などをしています（なかなか遊びには行けません）。後者は、子どもたちが帰ったあと、ノートを見たり、期限までの提出書類を作成したり、学年・校務分掌の仕事をしたり、初任者研修の指導案作りをしたりで、一番大事な教材研究するのは最後になってしまうこと

が多い（家に帰った後とか…）のが事実です。

疲れている中でも、「明日はこんな授業をすれば子どもたちが楽しく、かつ学力が身についてくれるんじゃないか」「このコメントを読んで、嬉しい気持ちになってくれるかな」など、明日の子ども

たちの笑顔を想像すると、自然と自分自身も意欲的に教材研究に力が入ります。子どもたちに教えられることが毎日のようにあり、「ああ、申し訳ないな」と思いながら成長させてもらっている自分があります。教員に対して風当たりの強い世の中ですが、信念をもって、可愛い子どもたちの健やかな成長を見守り手助けしあげたいです。

忙しさに負けない、趣味なども楽しんで気分転換をしながら、ちよつぱり余裕のある教師を目指して日々頑張ります。（いつになるやら…）

どんなときでも生徒と想いを共有したい

高等学校教員

「高校の教員になりたい。」そう思ったのは、今から約一〇年前の高校生のときでした。担任の先生をはじめ、学年の先生や生徒会の先生、部活の顧問の先生方

が皆生徒のために一生懸命向き合ってくださっていると感じたからです。「自分もこういう教員になりたい。」と思いました。

非常勤、臨任、正採用とすべての立場で教壇に立つてきました。それぞれの立場での悩みや不安はありましたが、常に心に決めていたことは、「どんなときでも生徒と想いを共有しよう。」ということでした。苦しいこと辛いことも、喜びも楽しみもいつも生徒と分かち合っています。

授業や部活動、行事、休み時間などで見る生徒の姿は、本当に輝いています。いつもそんな生徒と一緒にいられることに喜びに感じています。ときにはぶつかることも、不安もありますが、これからも生徒と共にあることを喜びにしたいです。

生徒がいるだけで毎日が楽しい！

この世界のプロを目指して

特別支援学校教員

本採用となつて約2ヶ月、本当に時間がつスピードが早く感じられます。今まで臨採として、知的障害の学校を中心に何校か経験してきました。そして、4月からは久しぶりに肢体不自由の特別支援学校の勤務となりました。約8年ぶりということ、毎日校務や生徒指導に追われています。それに併せて初任者研修があつたり、肢体自由に関する自立活動を勉強したりと、臨採の時には味わえなかった濃密な2ヶ月を過ごしています。

なつたのは、大学時代のボランティア活動での体験でした。養護学校に通っていた双子の知的障害児の保育ボランティアをしていました。最初は急に引つ掻かれたり、唾を吐かれたりと、かなりの衝撃を受けたのを今でも覚えています。その児童が利用している親の会のお楽しみ会の装飾作りをしていた時に、なかなか飾りが作れない私を尻目にその児童はさつさととても丁寧に作っているのを見て、私はこの児童たちが普段どんな勉強しているのか興味を持ちました。これが特別



(本文とは関係ありません)

支援学校を目指す理由となりました。そして、やっと夢がかなって一つの学校に長く勤務できるようになりました。じっくりと腰を据えて教育と向き合える環境となつたのです。私はこのチャンスを活かし、もつと特別支援教育についての専門性を高め、同僚はもちろん児童生徒や保護者や地域から信頼される教員を目指し、日々の自己研鑽に努めていきます。